

# *Bibliography of the Japanese Empire* (『大日本書史』) が言及するイソップ物語——盲教育とイソップ寓話——

吉見 孝夫

## 一 新村出の記述

日本におけるイソップの受容について何らかの発言をしようとする、新村出の目立たない些細な記述が取っかかりとなることがある。この小論もその一つである。まずは契機となった新村の言うところを引用しよう。

ウェンクステルンの『大日本書史』八九頁第七章「文学の部」に、'Elementary Works in raised Japanese type prepared by the (Scotch) Presbyterian Mission for the use of the blind'と題し、蘇国プレスビテリアン・ミッションにて盲人用の教科書を出版せしもの、八種の読本及び音図類などのうちに、「イソップ物語三十三ペイヂ」とある。これらの教科本は一八八一年(明治十四年)頃の出版だといふ。渡部氏の訳本より抄出したか、それともその後の新訳か、私は未だ確かめ得ない。(昭和三年一月十八日) 注一

『新村出全集』に目を通して、他には『大日本書史』のこの記述に言及した箇所は見当たらないので、それ以

降も確かめ得ずに終わったようだ。ならば、新村に代わって確かめられるところまで追究してみようというのがこの小論の主旨である。

## 二 *Bibliography of the Japanese Empire*

ウェンクステルン (Fr. von Wenckstern) の『大日本書史』とは次のような書である。原題は *A Bibliography of the Japanese Empire* (以後 *Bibliography*) である。補題に *being a classified list of all books, essays and maps in European languages relating to Dai Nihon [Great Japan] published in Europe, America and in the East from 1859-93 A.D. [VI<sup>th</sup> year of Ansei — XXVI<sup>th</sup> of Meiji]* であるように、安政六年 (一八五九) から明治二六年 (一八九三) にかけて海外において欧米の諸言語で記された日本に関する文献を、分野別にアルファベット順に羅列している。出版社はライデンの E.J.Brill だが、一八九五年にロンドンで出版され、その後一九〇七年に丸善から、一九二九年

には更正閣から、更に一九八〇年にはひたく書房からリ  
プリント版が刊行されている。国会図書館所蔵の更正閣  
版は手続きを取ればパソコンでも閲覧できる。

二三の分野に分類した七番目に新村のいう「文学の部」  
すなわち *Belles-Lettres* があり、*Aka-ho gi-si den is-seki wa*  
から始まって書名あるいは著者名でアルファベット順に  
文献がリストアップされている。その E の部分に新村  
の引用箇所がある。それを正確に引用するところである。

**Elementary works in raised Japanese type prepared by  
the Scotch Presbyterian Mission for the use of the  
blind.**

Hashi no hanashi, 10 pp. — Aesop monogatari,  
33 pp. — Sho-gaku niu-mon, 14 pp. — Sho-gaku  
toku-hon, 40 pp. — Iro-ha, one sheet. — Go-jū-on,  
one sheet. — Daku-on, one sheet. — Hō-tō-ko, 6 pp.  
(Published about 1881).<sup>注1</sup>

ボールド体となっているのは、この書では書名か作者  
名であるので、ここでは書名となる。新村のいう「八種」  
は、「はしの話」「イソップ物語」「小学入門」「小学読  
本」「いろは」「五十音」「濁音」「ホートコー」とい  
うことになる。「はしの話」は後述するように「橋の話」  
と思われる。「ホートコー」は不明としなければなら  
ない。*raised Japanese type* とは点字のように手で触つて  
わかるように浮き上がらせた文字である。これを盲教育  
史では凸字という。点字が普及する前には盲教育におい  
て種々の表記法が考案され実践されていた。凸字はその

一つである。*Elementary Works* という名の図書は見当た  
らない。おそらく、これらの盲児のための教育用の書籍  
をまとめてウェンクステルンが仮に名付けたと思われる。

それにしてもよくわからない記述である。対象とする  
the blind は何語を母語とするどこの国の盲人であろう  
か。タイトルは「はしの話」「イソップ物語」等日本語  
ばかりである。「いろは」「五十音」「濁音」は日本語で  
あつてこそ意味がある。*Bibliography* の補題にある in  
European languages とか published in Europe, America and  
in the East を文字どおりに解釈すれば、海外のどこかで  
ヨーロッパの言語で出版されたことになる。出版主体が  
はつきりしないが、*Scotch Presbyterian Mission* が関係し  
ているのであれば、スコットランドあるいはもう少し広  
くしてイギリスで英語で出版されたのであろうが、イギ  
リスの盲人に日本の凸字という手の込んだもので「小学  
入門」などを学ばせる必要などない。この内容を必要と  
するのは日本の盲人のほうである。筆者はヨーロッパの  
諸言語にも、ヨーロッパの出版事情にも全く詳しくない  
ことを断らなければならないが、調べた範囲内ではそれ  
らしい文献は見当たらない。そこで日本で日本語で書か  
れた出版物に範囲を広げて調査すると、それと覚しい文  
献が見つかった。その調査結果を以下に記す。

### 三 ヘンリーフォールズと楽善会

日本の盲人と、スコットランドのプレズビテリアンと

の繋がりを求めるとヘンリー・フォールズ (Henry Foulds, 一八四三〜一九三〇) という人物が浮かび上がってくる。フォールズは盲教育史関係書には必ず名が載る人物である。ここでは昭和一〇年 (一九三五) 刊行の『東京盲学校六十年史』を引用しておこう。傍線は筆者が付した。

当時の文献によればフォールズこそ訓盲事業首唱者中の首唱者なり、彼はスコットランド人にして医師、科学者且日本基督教会の宣教師なり、一八七四年明治七年三月五日日本に来る、当時の宣教師は大抵医師にして、先づ病者を治療し然る後伝道することを布教の手段としたりしが如し、彼も又一八七五年明治八年築地外人租界に築地病院と云ふ最初の真の伝道病院を設立す、又彼はダーキンの進化の原理につき特別講義をなせり、而して彼は盲人の為に凸文字型を以て新約聖書の一部、宗教上の小論文並に他の文献を発行して大に世の賞讃を博す、次に自ら主となり有志五名を集め訓盲の事を議し樂善会を組織したり。<sup>注三</sup>

フォールズの生涯に詳しい『指紋を発見した男』<sup>注四</sup>に従つてもう少し付け加えておこう。

フォールズはスコットランド南西部の町ブースに一八四三年六月一日、裕福な商人の子として生まれた。医師の資格を得た後、結婚したばかりのイザベラ・ウィルソンを伴って合同長老教会 (United Presbyterian Church) の医療伝道団の一員として一八七四年来日し、築地に病

院を建て一八八二まで医療に従事する。一八八五年に再び日本を訪れてもいる。一九三〇年に逝去。実は彼は指紋研究の開拓者であり、日本滞在中、イギリスの科学雑誌『ネイチャー』一八八〇年一〇月二八日号に発表した論文は世界最初の科学的指紋研究といわれている<sup>注五</sup>。

なお日本滞在中の経験を書いた著書 *Nine Years in Nippon* (Alexander Gardner, 1885)<sup>注六</sup>を遺しているが、これには盲教育について特段の記述はない。

傍線部分に注目すると、凸字で文献を発行したというのは、*Bibliography* のいうところと符合する。この中に「イソップモノガタリ」も含まれている可能性がある。

なお凸字の新約聖書の一部とはヘボン式ローマ字による新約聖書ヨハネによる福音書第九章 (キリストが盲人の目を明かす話) で、現在筑波大学附属視覚特別支援学校の資料室が所蔵する。

フォールズが組織した樂善会は日本における近代の盲教育の嚆矢となった団体である。その一員である岸田吟香がその設立を、当時所属していた『東京日日新聞』明治八年五月二十四日号で記事にしている。

一昨二十二日午後六時ごろよりゼルマン及びアメリカ教会社中ドクトル、フォール氏の築地小田原町の宅に於てプロフェッソル、ボルシャルド氏中村正直氏津田仙氏古川正雄氏并にこの岸田吟香も集會して盲人の為にカタカナの凸字を以て書物を板行し日本盲人の智識を開<sup>ひらか</sup>ん事を議せり 是レ此事に付ての第一會議なり<sup>注七</sup>

「フオール氏」はフオールズのことである。日本人は、岸田の他、既に『西国立志篇』で名をなしていた中村、津田梅子の父で後に青山学院の創設にも関わったクリスチャンの教育者津田、慶応義塾の初代塾長古川という、明治文化史に足跡を残す面々が加わっている。傍線箇所にあるように、この会は当初から凸字の書物の刊行を期し、明治一三年には楽善会訓盲啞院という教育施設を建設し、盲児を対象とした教育を開始している。してみるとフオールズが中心であった楽善会が『イソップ物語』を含む凸字本を刊行した可能性も考えられる。

幸い楽善会の活動を記した『楽善会訓盲啞院記録（翻刻）』（以下『記録』）が最近出版された<sup>注八</sup>。これによって同会の凸字書をめぐる動きを見ると以下のようにまとめられる。

明治一三年の段階で「凸文書籍の製造未た成らず」（一〇一ページ）という状態であったのが、同年末の一二月七日に『凸文小学生心得』が出来上がる（一〇八ページ）。これが最初である。そして翌一四年には『小学読本』第一、第三、『千字文』『偏旁字母』『詞の掟』の六巻が完成する（一一八ページ）。このように学校開設に合わせるように凸字本の刊行に力を注いでいる。『小学読本』を含み、刊行年が明治一三年（一八八〇）末から翌一四年にかけてであるのが、*Bibliography of Published about 1881* という記述と合致するが、「イソップ物語」の名は『記録』のどこにも見当たらない。明治一六年の「経費収入概算」に多くの教科書名が挙がっているが「イソッ

プ物語」はない。『イソップ物語』が楽善会の出版物である証拠は見当たらない。

#### 四 凸字版『イソップ物語』

実は凸字版『イソップ物語』は盲教育史においては知られた資料である。いささか遠回りをしたが、この点については一九〇二年刊の石川重幸『盲人教育』に記述がある。石川は楽善会訓盲啞院の後身東京盲啞学校で一八九七年から一九二五年まで国語科を担当した人物である。

又耶蘇教会に於て布教の方便として本邦盲人の為に片仮名の画を省略して凸字と為し小学読本、世渡の杖、伊蘇普物語、其他数種の書を印刷したるものあれども亦広く行はるゝに至らず<sup>注九</sup>

石川のいう「耶蘇教会」は、フオールズが所属した *Scotch Presbyterian Mission* と考えられる。「世渡の杖」を除けば *Bibliography* の記述と一致する。この凸字版『イソップ物語』が *Bibliography* の *Aesop monogatari* の有力な候補となる。他に候補となり得る図書は見当たらない。

ようやくイソップ寓話に関わる課題を論ずる段階に来了。凸字本の『イソップ物語』は二部現存している。一つは楽善会訓盲啞院の後身である筑波大学附属視覚特別支援学校（以後「筑波大附属校」）が、他の一つは京都府立盲学校が所蔵している。後者は日本で最初の盲学校である京都盲啞院の後身である。この二部は同一の版の

凸字本である。いずれも表紙左に「伊蘇普物語 全」と刷られた題簽を持つ。縦二七センチ、横一六・五センチの和装本である。本文は全文片仮名凸字で分ち書きが採られている。刊記、奥付の類はない。前述したように、これは盲教育史においてはよく知られた本である。ただ *Bibliography* の記載との関係、本文の底本を明らかにした論考はないようである。

では、この凸字本『イソップ物語』は、*Bibliography* のいう *Aesop monogatari* なのかどうか。凸字本は文字の性格上、裏面に文字を配することができない。本文は三三枚、三三ページであり、これは *Bibliography* に *Aesop monogatari*, 33pp. とあるのと一致する。両校の本がこの *Aesop monogatari* であることは疑いない。

この『イソップ物語』は一五のイソップ寓話を載せる。その本文を見るに、渡部温『通俗伊蘇普物語』（以下『通俗』）を底本としていることがわかる。今冒頭話の「ウマト ベツタウ ノハナシ」と『通俗』の該当話とを対照させる。傍線は筆者。

#### 凸字本『イソップ物語』

ウマト ベツタウ ノハナシ  
アルベツタウ カヒウマノ カヒバヲ ヌスンデ  
オノガモフケトナシシユジンニアヤシマレジトナガ  
ノナツジウヨリハタラキテソノウマノツメカミヲキ  
リアラヒナドシウツクシクミセントホネ オリ 半  
タレバ ウマガ アナタ ソンナニ ワタシヲ  
ヨク ミセヤウト オモヒ ナサル ナラ マア

スリミガク ノヲ タイテイニ シテ クヒモノヲ  
ジウブン クダサリマセ コレハ モトヲ  
ステ スエヲ ツトムル モノヲ ソシリ タル  
タトヘ ナルベシ  
『通俗伊蘇普物語』

馬と圀夫の話  
或圀夫飼馬の豆秣を窃むで己が所得となし。主人に  
怪まれじと永の夏中よく働いて。その馬の蹄鬣を剪  
り浴ひなどし。美しく見せんと骨折ゐたれば。馬  
「汝そんなに私をよく見せ様と御思ひなさるなら。  
マア梳洗の大抵にして。食物を充分下さりませ  
是は本をすてゝ末を努むるものを誹たる論言な  
るべし

傍線部分の「ヨリハタラキテ／よく働いて」「ウマガ  
／馬」「オモヒ／御思ひ」「ステ／すてゝ」「タトヘ／  
論言」といったテニヲハの違い、僅かな語句の言い換  
え、あるいは単純な誤植がある程度で、ほとんど同文で  
あることが看取できる。他話の引用は省くが、概ねこの  
程度の異同である。

掲載話を順に示す。カッコ内は『通俗』の掲載箇所であ  
る。

- 1 ウマト ベツタウ ノハナシ (『通俗』巻一  
第一三話)
- 2 コカニト ハ、カニノ ハナシ (『通俗』巻一  
第二八話)
- 3 テラヘ ニゲコンダ コヒツジノ ハナシ (『

『通俗』巻一第二九話)

- 4 ニハトリ ト ネコ ノ ハナシ (『通俗』巻一第三一話)
- 5 シ、ト ロバト キツネ ノ ハナシ (『通俗』巻一第三七話)
- 6 カゼト ニチリン ノ ハナシ (『通俗』巻一第四三話)
- 7 キト ヲノ、ハナシ (『通俗』巻一第四五話)
- 8 メジ、ノ ハナシ (『通俗』巻二第五六話)
- 9 ツバメト カラス ノ ハナシ (『通俗』巻二第六二話)
- 10 ブシト シ、ノ ハナシ (『通俗』巻二第五八話)
- 11 コドモト アザミ ノ ハナシ (『通俗』巻三第九〇話)
- 12 ヤギト ヤギカヒノ ハナシ (『通俗』巻三第一〇七話)
- 13 テンモンジャ ノ ハナシ (『通俗』巻三第一八話)
- 14 ゴケトメンドリ ノ ハナシ (『通俗』巻四第一三七話)
- 15 ニサツノテドメノ ハナシ (『通俗』巻四第一三九話)

このように、掲載順も『通俗』のそれにほぼ従っている。9の「ツバメト カラス ノ ハナシ」と10の「ブシト シ、ノ ハナシ」の順だけが入れ替わっている。

この一五話がどのような基準から採用されたのかについては、述べ得ることは少ない。『通俗』は全六巻からなるが、ここに採られたのは巻四までである。特に巻一からが七話と多い。イソップ寓話には視覚障害者(動物)が登場する話がある。『通俗』にも、「片眼の鹿の話」(巻一第三四話)、「盲人と狼児の話」(巻四第一四八話)、「老婆と医者の話」(巻四第一五一話)、「土撥鼠の母と児の話」(巻四第一五二話)がある。これらを避けたとはいえるだろう。

本文はすべて片仮名の凸字で書かれている。しかしその字体は正確には通常の片仮名字体とは異なる。まず濁点、半濁点がかなり大きい。また一部を省略した字形にしている。四節で引用した『盲人教育』にも「片仮名の画を省略して凸字と為し」とあった。以下にその一端を示す。

イ(イ) ウ(ウ) ヌ(キ) ケ(ケ) カ(サ)  
 ㇿ(セ) ㇿ(テ) モ(モ) ㇿ(キ) レ(ン)

これらの処置は手ざわりによる識別を容易にするための工夫にちがいない。

*Bibliography* 記載の Aesop no monogatari がいかなるものか、その本文の依拠したイソップ寓話集は何かといった、小論の目的は以上で達せられた。ただ同書に関わって抱いた疑問がいくつかある。そのうち二つにつき検



討してみたい。一つはフォールズは何故自身が創設者である楽善会とは別に凸字本を刊行したのか。他の一つは、この凸字本はどこでどのように利用されたのかである。

## 五 独自に凸字本を刊行した背景

楽善会には一八七六年（明治九）三月二六日に、当時工部大輔の地位にあった山尾庸三が加わる。以後中心的存在となっていく。『記録』によると山尾は加入に当たりこう発言している。

諸君従前の事態たる概ね外国人に依頼し、且つ彼の宗教の力を藉て、以て其志を遂げんと欲するに似たり。是余の甚だ喜はざる所なり。（三二ページ）

山尾は外国人の影響力、宗教性を排除しようと努めたのである。山尾の参加による楽善会の変化を前述の『東京盲学校六十年史』（東京盲学校は楽善会訓盲啞院の後身）は Otis Cary の著書を引用して認めている。括弧内も原文のまま。傍線は筆者。

然るに此事につきオティス・キアリ（Otis Cary）はその著「日本に於ける基督教の歴史」（A History of Christianity in Japan 1909）に於て『これより前（明治十三年以前）三年彼（フォールズ）は数名の日本基督教信者と協議を遂げ一慈愛協会を作ることに決した、而して其協会の目的の一は盲人の教育なりき、然るに一官吏（山尾庸三を指す）が此協会に加入するやう勧められて会友となるや協会維持の為に外国協会に依頼することに強く反対せり、然るに彼の意

見が認められ遂にその協会は明かに基督教的性質を失ふに至つた、……』と述べたり注一〇

Otis Cary の原文の、該当部分を含む部分を引用しよう。第一文は『東京盲学校六十年史』の訳にはない。実はこの第一文が小論にとつては重要であるが、そのことは次節で述べる。一部イタリック体にしたのは筆者。

A school for teaching the blind was opened *that year* at Tokyo in the hospital conducted by Dr. Faulds, who also about the same time caused some portions of the Scriptures and other Christian literature to be printed in raised type. *Three years before this* he had been in conference with several Japanese Christians who united with him in forming a philanthropic society, one of whose objects was the education of the blind. An official who was induced to join the society "strongly objected to its dependence on a foreign church for its support," and as his views were accepted, the society lost its *distinctively Christian character*.……注一一

若干の注解を施しておこう。英語の a philanthropic society を訳した「一慈愛協会」はいうまでもなく楽善会を指す。この引用部分の直前には一八七八年の事跡が書かれているので、that year は同年つまり明治十一年のことである。従つて Three years before this もその三年前、明治八年である。それでこそ楽善会が設立された明治八年に合う。『東京盲学校六十年史』のいう「明治十三年以前」は誤りとしなければならない。

『記録』をたどっても、明治九年以降フォールズの名は、明治十三年一月一二日に津田仙と同伴して、訓盲啞院の新築を見た記事があるだけである。楽善会は彼の思いとは離れ、自己の理想を実現するには別の道を行かざるを得なかった。独自に凸字本を出したのにはこういった事情があつたと想像される。

## 六 築地病院の訓盲所

二つ目の疑問。フォールズは自ら作製した凸字本をどこでどのように使ったのか。これを考えるうえで、前節で引用した部分の第一文の示唆するところは大きい。再掲する。

A school for teaching the blind was opened that year at Tokyo in the hospital conducted by Dr. Faulds, who also about the same time caused some portions of the Scriptures and other Christian literature to be printed in raised type.

これに拠ると、フォールズは自ら設立した筑地病院内に盲人教育のための学校を開設した。専門外ながら盲教育史関係の文献に一通り目を通した範囲内では、フォールズの事績には言及しても、彼が盲人のための学校を始めたとは書かれていない。果たしてこの記述は信ずるに足るものなのか。結論をいうと、これは事実と受け取ってよい。神戸で発行されたキリスト教系の雑誌『七一雑報』三巻第四八号（一八七八年十一月二九日）に以下の記事がある。

まず第一面の「目録」という目次に相当する部分に、和文で「築地病院に訓盲所を設く」、英文で *School for the blind at the Tsukiji hospital* とある。そして第四面に僅か三行ながら本来の記事が載っている。傍線は原文のまま。

○築地病院内に訓盲所を設けてフォールズ、グリイン、デビソン、ツールの諸氏ならびに日本人も毎日教授する事になるよし注二

確かに築地病院内に盲人のための教育施設が作られたのである。四人の名前があるが、中心になったのは、築地病院を建て、率先して盲教育の必要性を説いてきたフォールズであつたにちがいない。院内施設であるから学校というよりも教室と呼んだ方が実体には近いとは想像される。そうであつたとしても、日本で最初の盲人教育施設、京都盲啞院が設置されたのが、一八七八年（明治一一）五月二四日であり、この記事がその半年後であることは注目してよい。楽善会に依る訓盲啞院設立の二年前である。この施設で使用する目的で、フォールズは凸字本の作製に尽力したと考える。*Bibliography* の *Published about 1881* はこの築地病院内施設設立の二、三年後を意味する。

## 七 補足

以下調査の過程で気付いた補足的な事項を述べておく。

1 『盲人教育』がいう耶蘇教会が刊行した『小学読本』とは *Bibliography* にある *Sho-gaku toku-hon* にちがいな



い。もう一つ、三節に記したように楽善会も凸字の『小学読本』を出している。現在筑波大附属校は凸字『小学読本』を一本所蔵している。これには漢字、片仮名が使用されているが、その片仮名の大きさ、字体は、凸字本『イソップ物語』のとは全く異なる。筑波大学附属校本は楽善会のものと思われる。

3 京都府立盲学校は現在『橋ヲ渡ル心配』という片仮名凸字本を所蔵している。これは *Bibliography* にある *Hashi no hanashi*. 10 pp. と推測される。本文が一〇ページと一致している。

盲教育という全く見ず知らずの分野に入り込んだ故に、的外れの言辞を弄したのではないかと危惧する。もしこの小論に採るところがあるとすれば、*Bibliography* の *Aesop no monogatari* とカタカナ凸字本『イソップモノガタリ』を結びつけた点、その底本が『通俗伊蘇普物語』と認定した点、フォールズが明治一年という早い時期に盲児のための教育施設を開いたことを明らかにした点であろうか。

盲教育関係の資料の閲覧、書誌情報に関しては、村山彩氏を始め筑波大学附属視覚特別支援学校資料室の方々、京都府立盲学校資料室の坂本健次郎氏のご助力を賜った。就中、日本盲教育史研究会の岸博美氏の資料提供、御教示がなければ、小論は成し得なかった。ここに深く感謝申しあげる。

注

一 『伊曾保物語』の旧代和本」(『天草本伊曾保物語』— 新增附録、一九二八年一〇月。『新村出全集』第七卷所収)

二 Fr. von Wenckstern : *A Bibliography of the Japanese Empire* (E.J.Brill, 1895)

三 東京盲学校編『東京盲学校六十年史』(東京盲学校、一九三五年一月二〇日)

これが依拠した文献の一つは、一八九八年(明治三十一)刊行の H. Ritter の *A History of Protestant Missions in Japan* (The Methodist Publishing House, 1898) と覚しい。とくに「又彼はダーキンの進化の原理につき特別講義をなせり、而して彼は盲人の為に凸文字型を以て新約聖書の一部、宗教上の小論文並に他の文献を発行して大に世の賞讃を博す」の箇所はそのまま訳したかのようである。この英書はフォールズの功績を概括した最も早い時期のものであるが、これまで言及されていないと思われるので、引用しておく。

Dr.Faulds delivered special lectures on Darwin's theory of evolution.....Dr.Faulds also earned great praise by the publication of portions of the New Testament, religious tracts, and other literature in raised type for the blind; as well as through the assistance he rendered to a company of Japanese philanthropists, in the erection of a blind asylum to which the Emperor himself contributed. Such labors of love showed in the clearest light, that it was not

only zeal to make proselytes, but mercy and love which governed the missionaries.

四 コリン・ビーヴァン著、茂木健訳『指紋を発見した男』（主婦の友社、二〇〇五年五月二〇日）

五 フォールズの功績を称えて警視庁は一九六一年に、フォールズの旧宅跡（現在の聖路加国際病院近くの歩道の植え込み。ただし聖路加国際病院の前身の築地病院はフォールズの築地病院とは無関係）に指紋研究発祥の石碑を建てた。碑の文章はいくつかの書籍に引用されているが、筆者の見るところとは若干の語句の相違があるので、ここにその全文を示す。原文は横書き。

#### 指紋研究発祥の地

#### ヘンリー・フォールズ住居の跡

ここは明治初年にあつた築地居留地の18号地で、英国人医師ヘンリー・フォールズ（1843（1930）が明治7年（1874）から同19年（1886）に至る滞日中に居住した所である。フォールズはスコットランド一致長老協会の宣教師として来日し、キリスト教布教のかたわら築地病院を開いて、診療に従事した日本人の有志とはかつて、盲人の保護教育にも尽力した。

彼はわが国で行なわれていた指紋の習慣に興味をもち、たまたま発掘された土器に印象されていた古代人の指紋を発見し、これにヒントを得て、ここではじめて科学的な指紋の研究を行なった。明治13年（1880）10月英国の雑誌「ネーチュア」に日

本から投稿した彼の論文は科学的指紋法に関する世界最初の論文といわれ、その中で早くも犯罪者の個人識別の経験を発表し、また指紋の遺伝関係にも言及している。明治44年（1911）4月1日わが国の警察において、はじめて指紋法が採用されてから満50年の今日、ここゆかりの地に記念碑を建立しその功績をたたえるものである。

六 長尾史郎、高畑美代子が『明治大学教養論集』五二三号（二〇一七年一月三十一日）以降に、その翻訳を掲載し続けている。

七 『東京日日新聞 7』（日本図書センター、一九九四年六月二五日）の復刻版に拠る。

八 筑波大学附属視覚特別支援学校資料室編集『楽善会訓盲啞院記録（翻刻）』（桜雲会点字出版部、二〇二三年七月三十一日）

九 石川重幸『盲人教育』（育成会、一九〇二年一二月二七日）。児童問題史研究会監修『日本児童問題文献選集17』（日本図書センター、一九八四年四月二五日）の復刻版に拠る。

一〇 注三文獻。

一一 Otis Cary: *A History of Christianity in Japan* (Fleming H. Revell Company, 1909)

一二 『復刻版 七一雑報 第3巻』（不二出版、一九八八年六月二五日）に拠る。

なお、日本盲教育史研究会の岸博実氏、『近代日本盲教育史 当事者主体の教育とは何か』（不二出版、

二〇二四年七月二五日）の著者足立洋一郎氏に問い合  
わせたところ、この『七一雑報』の記事に言及した論  
考はないと思われるとのことであつた。